

19 杉田玄白門人高峰幸庵について

津田進三

越中高岡の蘭方外科医長崎浩斎は、文化十年十五歳のとき富山に來遊した杉田玄白門人の高峰幸庵について蘭方を学び、のち幸庵の紹介により杉田立卿と大槻玄沢とに師事している。この高峰幸庵は京の吉益南涯、賀川玄廸に学び、更に江戸の杉田玄白、杉田立卿、土生玄碩及び大槻玄沢らに学んで、蘭方眼科を以て世に知られた人である。

高峰幸庵は諱は寛容^{ノケモリ}、字は君象で、鼎亭又は遵時園などと号している。金沢市立図書館蔵の「先祖由緒井一類附帳」によれば、高峰氏は大和国添上郡三笠卿の豪士高峰刑部を祖とし、その孫の岩城慶庵が京にて典薬頭半井鹽庵法印に医を学び、元和年中師に同行して江戸に出て福井藩主松平家の侍医となったのが医系の祖となつてい

る。のち藩主の国替で越後高田へ移り、仙庵を経て元陸のとき藩主の津山への国替に同行せず高田に留まり、高峰姓に復している。そして幸庵、幸伯を経てこの幸庵寛容に至っているが、この幸庵は高峰讓吉の曾祖父である。

幸庵の若年の師承は未詳であるが、のち京に上り、吉益南涯門人の吉岡某の学僕となつて南涯に師事し、「金匱要略紀聞」、「傷寒論紀聞」など師の口述を筆記編集しているが、特に「余曾在吉益南涯先生之塾時 見先生机上常解体新書一部 其唱氣血水之說或本干此欵」という感触を得ていたことは重要であろうと思われる。幸庵はまた賀川玄廸に産科を学び、文化三年その免許を得ている。

ついで幸庵は江戸に出て杉田玄白に入門し、更に杉田立卿、土生玄碩及び大槻玄沢らに学んでいる。土生玄碩の『迎翠堂門人録』には第四番目に杉田立卿があり、九番目に高峰幸庵の名が記されている。長崎家蔵の『遵時園方函』は幸庵が杉田立卿と土生玄碩の常用処方編集したものであるが、眼水薬篇、蒸露水篇、洗薬篇、糊薬篇、硬軟膏薬篇、眼点薬篇、服薬煎劑篇、丸散方、雑方及び油製造篇などの各篇から成っており、すべて九七方

を収めている。各処方には主治と病因を示してから具体的な製剤法を詳しく記し、更にその用法にも及んでいる。例えば「当帰大黃湯」の項には、「……内障療術ヲ施スノ前十日斗リ此湯ヲ服セシメ 且療術ヲ施シテ後眼球焮腫去サルノ内此湯ヲ服セシム」などと記されている。幸庵には『良方紀聞』の著もあって早くから薬物や処方に関する関心を抱いており、例えば高田藩家老鈴木甘井の著書『熊胆真偽弁』にも親しく関与実験をくり返えし、大槻玄沢に批判を乞い、本書に序言を依頼している。(『蘭腕摘芳』三編卷之二)

一方幸庵は泰西の医療器具に対する関心も強く、杉田玄白が「諸厄利亜国産科要具」を所持するのを知り、直ちにこれを模造し(『鵲齋先生嘗得之於骨董舖 幸庵翁模造以藏』)、のち京の賀川玄岱に贈っている。また注目すべきことには、『厚生新編』の「越^{エレ}列^{キタイリ}吉^リ低^リ力的^{テイト}乙^ト多」の項(同書第三七冊)には「北越の一医生高峰氏自ら嘗て此器を造製し 種々試験せしと語れる中に……是を偏枯の病者に施し試みた」ことが記されている。

幸庵は文化十年冬越中富山に來遊して長崎浩齋に入門

を許したが、彼はまず全身の理を知ることが「我家入門之第一義」であるとして、まず『解体新書』を、ついで『西説医範眼目篇』を講じており、更に翌年高岡へ移つて熱心に薬剤の製煉法を教えている。幸庵の医説は、その著『西説瘍医概言』などにも「夫レ人身ノ活用運動スル所以ノ根元ニ千百ノ備アリ 而シテ神經是が用ヲナサシムルナリ」、「詳ニ其起元ヲ問ヒ 病勢ヲ考エ 治ト不治トヲ弁別シテ治ヲ施スベシ」、「蓋其無病ヲ知テ有病ヲ治シ 平生ニ復スル也」、などと繰返し記されている。

高峰幸庵は越中高岡にて一日千服の薬を出す多忙の名医として知られ、『微毒精蘊』『医事旅行濟生方』『西説眼球解剖篇』など数々の著書をのこして、文政八年(一七二五)二月二七日四七才の生涯を閉じたのである。